

みんなの広場

(題字は千葉理事長)

※右の黒点は、題字と同じ内容を点字で表したものです。



がんばって登ったよ! ～和光学園 鞍掛山登山～

6月19日、小学生20人が鞍掛山(滝沢村・標高897m)に挑みました。

当日は天候にも恵まれ、たくさんのボランティアの方々の協力のもと、全員登頂に成功!

山頂から望む雄大な岩手山をバックに記念撮影も行いました。

主な内容

- リスクマネジメントの取り組みについて … 2
- 各施設から …… 3
 - ・保護施設通所事業について(好地荘)
 - ・ケアホーム「くるみ」新設について(やさわの園)
- 副施設長座談会 …… 4、5
- 中山の園管理センター地域支援部のご紹介 … 6
- 被災児童支援(いわて子どもの森) …… 7
- 新任職員指導担当が伝える仕事術(たばしね学園)
- 製品紹介(こぶし) …… 8

みんなの広場

2011 第110号 平成23年11月1日発行

発行/社会福祉法人岩手県社会福祉事業団 〒020-0114 盛岡市高松三丁目7-33
電話 019-662-6851 FAX 019-662-8044
URL http://www.iwate-fukushiro.jp E-mail fukushij@iwate-fukushiro.jp

「自家焙煎コーヒー」

(障害者支援施設こぶし)



法人内の施設で生産や販売している商品を紹介します。



障害者支援施設こぶしでは、20年前に中山の園で始まったコーヒーの生豆選別・自家焙煎作業を引き継ぎ、現在は、就労継続支援B型事業を利用する地域の方や、生活介護の利用者が日中活動の中で作業を行っています。

利用者の皆さんの生豆選別作業は、ひと粒ずつ、とても根気のいる作業ですが、日々豆と向き合い頑張っています。

コーヒー豆は定番のコロンビア・ブラジルなど6種類を焙煎しており、特に「ゆめれたすブレンド」は苦みとコクのふかい味わいが人気で大変好評いただいております。

また、包装には「ライブパック」という特殊包装を使用しており、焙煎後、コーヒーから出るガスを自動的に放出し、更に空気の侵入を遮断、酸化を防ぎ、煎りたての味と香りを長時間保ちます。

コーヒー豆は敷地内にある喫茶店「ゆめれたす」、

岩手県庁生協、各種イベント等で販売しています。また、発送やギフトセットなど、ご要望に応じて行っておりますので、ぜひご利用ください。

(生活支援員 菅原 いく子)

*「カシオペアブレンド」「モカ」は現在販売休止中です。



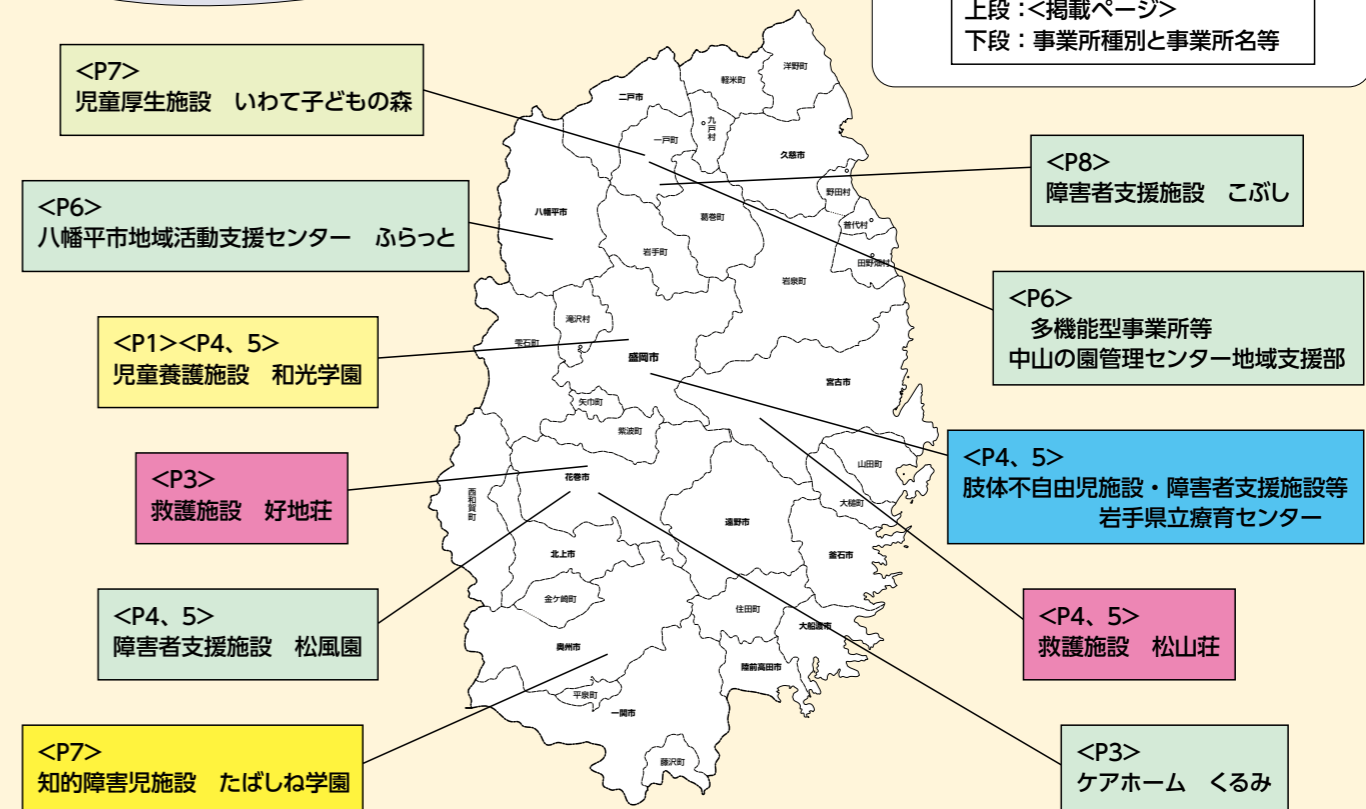
「ライブバックセット」贈り物にいかがですか?

《詳しいお問合せ先は…》

「出会いの店ゆめれたす」 ☎0195-35-2074
(日曜日から木曜日10時半～15時半)

「障がい者支援施設こぶし」 ☎0195-35-2691

今回掲載した事業所の所在地はこちらです!



ひろ～い岩手県内に点在する各施設や事業所。「事業所は県内のどの辺にあるの?」という声にお答えします。

事業団における 取り組みの経過

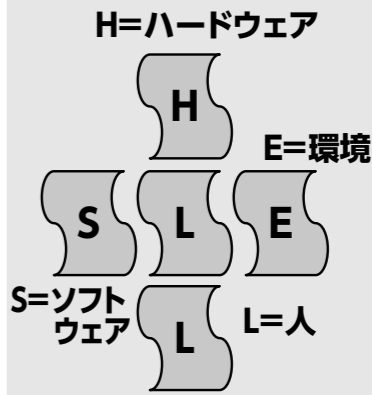
岩手県社会福祉事業団では、平成16年に「岩手県社会福祉事業団リスクマネジメント推進指針」及び「実施要綱」を制定しました。

これまでも、各施設でそれぞれリスクマネジメント（*注1）についての取り組みを行っていましたが、組織的に課題の分析や対策を行うまでには至っていませんでした。

制定の背景となったのが、平成15年施行の支援費制度です。「措置」から「契約」となり、社会福祉施設を取り巻く環境が大きく変化する中、安全かつ質の高いサービスを継続的に提供するという新たな対応が迫られるようになりました。そこで、企業経営の視点から生まれた「リスクマネジメント」を、福祉分野でも導入し、安全確保等を行うシステムの構築が図られるようになりました。

当事業団では、本部（事務局）委員会や施設等委員会、リスクマネジャー等を配置し、事故を従事者の過失（ミス）と

SHELモデルの概要図



だけみならずではなく、組織の課題として解決する仕組み作りを行いました。

取り組みを続ける中で、インシデント（*注2）の件数は少ないものの、アクシデント等の重大事故が起こったり、類似の事故等の事例が続いたことが課題として浮き彫りとなりました。

さらには、平成18年からの障害者自立支援法の施行、県からの自立化に向けた設備・職員数等の見直し、利用者の高齢化等、事業団を取り巻く状況も変化していきました。

これからの リスクマネジメント

そこで、これまでの課題に対応し、かつ、いま求められるサービスに応えるた

好地荘を退所したAさんの暮らし

保護施設通所事業の取り組み

「自分の人生を生きる」

好地荘を退所し、この秋で2年になるAさん。60代の男性で、アパートに単身で住む精神障がいの方です。

Aさんは、人と関わるのが極端に苦手で、退所する時は「今後、好地荘とは一切の関係を断りたい。」と宣言していました。

しかし、2年経過した現在、医師、訪問看護、社会福祉協議会のほか、好地荘も関わりを継続しています。

最初は訪問日にアパートを留守にするAさんでしたが、最近は冷たい飲み物を出して出迎えてくださいます。なんと、飲み物のグラスまで冷やしてーそこでは、20年前に亡くなったお母さんの話、「高倉健は今何をしているのだろうか」「高倉健は今何をしているのだろうか」など、芸能人の話で盛り上がります。職員が制度利用の手続きや家事のお手伝い



（主任生活指導員 興羽州子）
*保護施設通所事業とは
保護施設退所者が、地域で自立した生活を継続できるように支援する事業であり、「通所訓練」と「訪問指導」の2つの利用形態があります。

をしようとすると、「できることは自分でやります。施設には戻りたくないので。」と断られます。でも実は「できないから、書いて出しといて下さい」と、書類式持ってきましたよ。」と社協の専門員さんが教えてくれることもありました。自分なりの矜持があるのでしょうか。

好地荘では、他の機関と連携し、不穏時の服薬調整やケア会議開催により、Aさんの生活を見守ってきましたが、他にも、退所した方への通院付き添いや手続きの同行等、具体的な支援を行ってきました。これらのアウトリーチ活動を、好地荘の事業として太い幹に育てられたらいいなあ、とずっと思っていました。そして今年度の6月から始まったのが、保護施設通所事業（*）です。誰かと一緒に住む方が安心だ、という方のために、共同生活ホームも立ち上げました。

これからも、自分の足で確かな人生の歩みを進めている皆さんの力になれたら、と願っています。

め、平成22年度から検討を重ね、平成23年8月に実施要綱の改正を行い、さらに取扱要領の新規制定を行いました。

要綱改正の趣旨は、①インシデントの情報も多く集め、アクシデント（事故）を未然に防ぐ仕組みの構築、②副施設長をゼネラルリスクマネジャーとすること、③インシデント・アクシデントレポート様式の変更等です。特に、③については、「SHELモデル」（*注3）を導入し、組織として事故の分析、対策の立案を行うこととしました。

また、平成23年7月には、障がい者への支援リスクを先行して学んできた、たばしね学園の千葉亨園長を講師に、担当職員が「気づきの感性を高める危険予知訓練（KYT）」の研修を受講しま



※危険予知訓練の事例

イラストの状況から、チーム全員で予想される危険を導き出す作業を行う。

した。「危険予知訓練」とは、自らの属する環境を「リスク」という視点で捉え直し、未然に防止策を立てること、組織全体での話し合いを通して、チームワークが向上することなどが期待されるものです。

千葉園長の講義の中で「人間はミスを犯すもの。ミスをした職員だけを責めるのではなく、事故を組織的に防ぐ取り組みがリスクマネジメント」というお話がありました。

社会や環境が変化する中にあっても、我々は組織として利用者と職員の安全を守り続けることが求められます。

一危険予知訓練の進め方

- 以下のテーマについて、全員でできるだけ多く意見を出し合う
- ※ラウンド1 【現状把握】どんな危険がひそんでいるか
- ※ラウンド2 【本質追究】これが危険のポイントだ
- ※ラウンド3 【対策樹立】あなたならどうする
- ※ラウンド4 【目標設定】私たちはこうする

（*注1）考えうる危険的な事態を回避、あるいはそのことによる被害を最小限にとどめるための仕組みや活動。
（*注2）事故には至らないものの、事故につながりかねない潜在的な事例。
（*注3）航空分野のリスク分析手法として生まれ、医療や福祉分野においてリスク要因や背景の分析ツールとして応用されたもの。当事者を中心に、ソフト面、ハード面、環境、人との関係性を分析する。

重い知的障がいを持つ方々であつても、地域の中で安心して生活できるようにすることが重要

との考えから、保護者・地域の方々の理解を得ながら、これまでの実績を踏まえ、平成23年8月1日、共同生活事業所「オリザ」3つ目となる、ケアホーム「くるみ」を開所しました。同ホームは28歳～58歳の女性5人が入居し、障がい程度区分が4～6（平均5.2）と、比較的障がいの重い方々が暮らしているため、世話人が泊まりこみ、支援員が早番と遅番の勤務で支援をしています。

ケアホームでの生活が始まり、施設では味わうことができない様々な体験をするようになる。これまでとは違った表情が見られるようになりました。たとえば、世話人が作る料理を見ている時の穏やかな表情や、リビングにゆつたりと腰を掛けて過ごす様子は、施設ではほとんどみることがありませんでした。また、先日は高木団地の夏祭りに参加し、地域の皆さんからたくさん声を掛けていただき、夏の夜を楽しんできました。

このような心から楽しんでい

ケアホーム「くるみ」を開所しました！

共同生活事業所「オリザ」（やさわの園）



新ケアホーム「くるみ」です。

活事業所で「そのひとらしい暮らし」を支えていきたいと思ひます。

（サービス管理責任者 及川 友枝）

る様子を見ると、改めて、本当に開所してよかったと思います。

ケアホームの目的は、重い障がいがある人でも「普通の家」で「普通の暮らし」を「その人らしく」送ることができるよう支援することです。今後も、保護者地域の方々のご理解とご協力をいただき、やさわの園と共同生

特別企画 第2弾 座談会

マンパワーを引き出す副施設長の技と思い

藤原 本日は忙しいところありがとうございます。さいます。前回、施設長座談会を掲載し、施設長の立場や考え方がわかったという声が多くありました。山に登ってみたいと頂上ことがわからないように、わかっているようでいながら、その立場にたつてみないとわからないことは意外に多く、施設長や副施設長についても同様のことがいえるでしょう。ぜひ、今回の副施設長座談会を通して、次の世代の人たちの参考になるよう、ご苦労されている点や立場などを話していただきたいと思ひます。

藤原 施設長が施設や経営の責任者であるなら、副施設長は施設長を補佐しながら、現場を管理する立場にあると言えます。副施設長として、実質的に管理する立場として感じることもやご苦労などはどう感じますか。

鈴木 四月に赴任したばかりで、立ち止まる暇もなく、日々が過ぎていくというのが率直な感想ですね。事務員、業務のスーパーバイズ、保育士として複数の役割をこなしています。

にとつて、「医事」に関することはとても難しいです。療育センター事務局内の職員の状況の把握、各部の取りまとめなど、様々な分野について、教わりながら進めています。

藤原 仕事の幅が広がると大変なことが多くなります。経験できることも多くなりますし、ノウハウを持った人から学ぶことも多くなりますね。人を育てたり、自分が育つたり、いろいろな視点を持った人たちがいる中で学んでいけるというのは成長の機会でもあります。

中道 非正規職員の育成を積極的に進めたいと考えています。研修、講習会への出席により様々なチャンスを提供するようにはしていますし、話を聞く機会を多く設けるようにしています。

藤原 チャレンジの機会を与えるというのは良い取り組みですね。話を聞く場合、集団以外に個別に聞けば話しやすく、個々の声が聞かれるものです。現在、業務改善活動の取り組みが行われていますが、提案をすぐに採用できない場合でも、上の人たちが真剣に聴くことで、提案した側もうれしく感じるものです。

佐藤 職員の皆さんに係長級の仕事を体験させないといけないと思っています。これから五、十年先を担う職員にチャレンジしてもらったり、そのフォローができればと思います。松山荘は入所とケアホームの利用者を合わせると1200名を超える施設ですので、職員一人あたり

割を兼務しているのが副施設長であり、自分がどういう立場で向かっていくのか、任用や責任、経営など様々な視点をもっていないければなりません。

藤原 係長級の立場からみれば簡単そうに思えたことが、実際にその立場に立つて初めて難しさが見えてくることもありそうです。

鈴木 これまで、ずいぶん生意気なことを言ってきたんだなあと思ひ反省しています。

佐藤 副施設長となると、直接的でないことが多くあります。指示を出して部下を動かすことの難しさや大変さ、いろいろな角度をもつてやらなければならぬことがあると感じています。これまで大枠を捉えていけばよかったことも、しっかりとした解釈が必要であることが多くなりましたね。

藤原 経営に近い立場になるほど、人を使つて成果を上げる技術が求められるように

が管理するケースの数が膨大であり、業務量の軽減を本気で考えなければなりません。

藤原 職員が少しずつ慣れるよう、フォローしてあげることが大切ですね。

鈴木 まずは、自分が元気であること、その日の気分に変化することなく、常に同じ状態で、何をしても応えられるようにしたいと思っています。被虐待児童の割合が増えると、支援する側の職員にも精神的な負担が増えます。そのような時に、気軽に声をかけ、気になるときに話ができる存在になりたいと思っています。

藤原 明るさというのも大事なことです。人は相手の表情をみて行動したり判断したりしますからね。明るく元気なことが、全体の活気、職場の雰囲気作りにとつても重要です。

藤原 最後になりますが、これからご自身の施設をどうしたいか、抱負などを交えて、考えなどをお聞かせください。

佐藤 松山荘は救護施設ですが、三障

なりますからね。

中道 副施設長は中間的立ち位置にあると思ひます。直接現場に入るわけではありませんで、職員にどのような動いていただき、気づいてもらえるか、その働き掛けが難しいですね。ですから、職員を育てること、超過勤務の軽減を含む職場づくりを力を入れて取り組んでいます。

細谷 療育センターは異なる六つの施設が集まったようなところですね。赴任当初、決裁文書等の多さに驚き、そこで、各部長等がそれぞれの判断で可能な事項について専決できるよう承認をもらい施設長等の事務処理の軽減を図ったつもりですが、まだまだ、施設長等から判断をもらわなければならない案件が多いことも事



松風園副園長:中道三七江
松風園：障害者自立支援法に基づく、障害者支援施設。障がい者の就労に力を入れ、約900人が就職に成功。しかし、震災により障がいを持つ方の就職は厳しい状況になっている。北上市に障がい者就業・生活支援センター「しごとネットさくら」、相談支援センター「しょうふう」の連携により、障がい者の就労へさらに力を入れる。また、障がいの重い方々に対して、生活介護のサービスも行っている。



岩手県立療育センター事務局長:細谷優光
岩手県立療育センター（旧・岩手県立都南の園）は、平成19年から岩手県社会福祉事業団が指定管理者となり、今年で5年目となっている。児童福祉法に基づく肢体不自由児施設（入所・通所）、医療法に基づく病院、障害者自立支援法に基づく障害者支援施設、発達障害者支援法に基づく発達障がい者支援センターの機能を持ち、多様な職種の職員で構成されている。



和光学園副園長:鈴木美津子
和光学園：児童福祉法に基づく児童養護施設。始どの利用者に親がいるものの、様々な事情を抱え入所している。7割が虐待を受け、現在は幼児の割合が多くなる傾向にある。そのほか、児童自立援助拠点運営事業の受託や、H23年3月に開所した自立援助ホーム「ステップ」の開所により、児童養護施設退所児童等の自立した生活が継続できるよう支援を広げている。



松山荘副院長:佐藤宏昭
松山荘:生活保護法に基づき、生活の場を提供する救護施設。セーフティネットの役割に加え、通所・居宅訓練の地域移行事業を併せて行う施設として、全国に20か所しかない中の一つ。入所者の8割の方が何らかの障がいを抱えている。触法精神障がい者や震災で生活基盤が揺らいだ人々への支援も急がれるところである。

がいに加え高齢者福祉ニーズも高まっています。ニーズ多様化への対応に努めるとともに、本来の救護施設の役割をしっかり果たしていきたいと思ひます。また、震災で被災した方々への支援として、仮設住宅で暮らす方々の情報収集や支援など、地元で密着した対応をしっかりと行っていきたいですね。

中道 触法の障がい者の利用も増えており、相談支援センターなどと連携しながら、支援を行っていききたいですね。そして、就労支援を積極的に行ってきた施設ですので、アンテナを広げ就労に向けて取り組んでいきたいと思ひます。

細谷 今年度、療育センターは指定管理期間の最終年にあたります。新しい療育

実で、各部との連絡調整係として対応にあたっています。

藤原 上司の仕事の負担を軽減するというのは素晴らしいですね。仕事をパッケージ化、パターン化して、誰でもできるように工夫することは大切ですね。

藤原 人材育成や労務管理など、副施設長として対処すべき課題がたくさんあると思ひます。副施設長の下で自身が管理されてきた時代と、実際に管理する立場に立ったときの違いについて感じることもや、現在重点的に取り組んでいることなどがあればどのようなものですか。

細谷 福祉分野で長年働いてきた職員

センターを見据えて、次期の指定管理をを目指したいと考えています。

鈴木 児童養護施設は大舎制から小舎制へ、そして家庭的養護が求められていますので、推進を図っていききたいと思ひます。

藤原 副施設長とは、いわば施設の要です。経営管理層として、後輩の職員にとつて一番身近な存在ではないでしょうか。激しく環境が変化する中、新しい取り組みなどでもご苦労されていると思ひますが、より良いサービスが提供できるよう、決意をもって仕事にあたっていたきたいと思います。本日はありがとうございます。

被災地へ届け^{Part 2}

「いわて子どもの森児童招待事業」について

みんなの広場109号において、いわて子どもの森の東日本大震災に伴う支援活動を紹介しましたが、今回は、その一環として実施している「平成23年度被災児童活動支援事業」の内容や実施状況についてお話しします。

被災地では、子どもたちがおもしろい遊びができる環境が十分確保されていない状況であることや、子どもたちの孤立化を防ぐことが重要となっています。そこで、いわて子どもの森では、本事業をとおり、子どもたちとその親、地域の関係者を子どもの森に招待し、のびのびと楽しい遊び体験を通して、子ども同士や親子の交流を図っています。

これまで、日帰りも含めて3団体を招待しましたが、ワークショップ



「今日はディナーバイキング」

プはもちろん、一戸地区の理容師・美容師の方々による散髪や温泉への招待、児童相談所の心理担当職員による相談対応など、バリエーションに富んだ内容でお迎えしています。

参加された子どもたちからも、「楽しかった!!」という感想や「遠くてなかなか行くことができない子どもの森に行けてよかった」というお話を多数いただいています。

す。冬休み期間も招待事業を実施し、雪遊びなどの普段できないような遊びや体験を企画しています。

今後においても、関係機関等のご協力をいただきながら、被災地の子どもたちが元気を取り戻していくよう支援していきたいと思っています。

(主事 吉田 豊)



「カッコよくなったかな」

今回の指導をきっかけに、自分の新任の頃の「あつちの先輩、こつちの先輩方」の「良いところを自分から盗んで身につけた時代、厳しくもあつた時代がなつかしくよみがえります。おばあちゃんの知恵袋ではないですが、どの家庭も祖母や母親から一般的な道徳は伝授されていた時代ですので、日常業務に欠かせない身辺処理面の援助等は、それほど細かい指導を受けずとも実施できていたように思います。時代の流れと共にずいぶん世の中が変わり、生活が変わり、考え方が変わりました。人から人へと受け継がれていたものが薄

三月の東日本大震災の影響で、どの施設も大変な状況の中、難関を通過して採用された大事な25人の人材が新任職員として各施設に配属され、たばしね学園には、男女2人の職員を迎えました。指導担当職員として一般常識事項を40項目、専門事項を32項目、予め作成しての取り組みでしたが、各項目は指導する立場にとても自分を省みるような内容が含まれています。

フレッシュマンへ
新任職員指導担当が伝える仕事術
「私が伝えたいこと」

たばしね学園 主任保育士 長谷川 正子

れ、物を片付けられない人々が増え、それでも機械にはめっぽう強い現代っ子たち。

正直なところ指導は、洗濯物の干し方、布団の敷き方、物を片付けなごらの処理の仕方等、手本を示すことを心がけて、一から関わりを持たせていただいています。「教えてもらうのを待つのではなく、自分から技術を盗んで覚えていく!」これが、仕事を早く覚える基本であり、仕事術だと思います。

機械(パソコン)に弱い我々年配世代も「技術を盗む」ことに目覚め、機械に強くなければと思う今日この頃で、こんな相互関係の中から、指導期間終了後には、職員としての本来の力を発揮してくれるものと楽しみにしています。



地域に支えられ
地域とともに

地域支援の拠点基地

中山の園管理センター地域支援部

中山の園管理センター地域支援部は、利用者の地域生活に関わる支援を中心に幅広く事業を展開しています。

「相談支援」

二戸圏域において、在宅者の個々のニーズや希望の相談に応じています。

「地域生活支援センター」

就労継続支援B型事業

「ひこうせん中山」

生活介護事業「ひこうせん沼宮内」

「共同生活事業所」

現在、中山地区と二戸市、岩手町、八幡平市に計十六ホーム三事業所の運営を行っています。

「地域活動支援センター」

八幡平市地域活動支援センター

「ふらっと」

岩手町地域活動支援センター

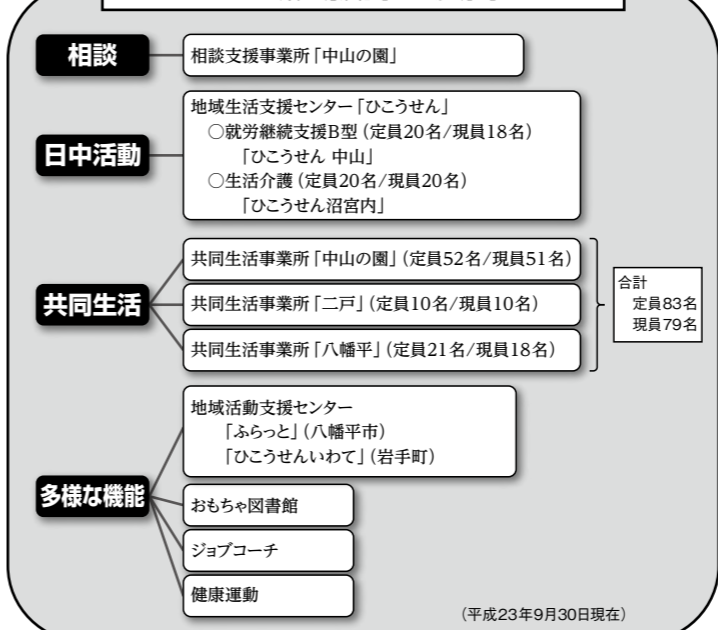
「ひこうせんいわて」

「おもちゃ図書館」

児童・幼児のおもちゃから、高齢者に対応したアクティビティなど、おもちゃの機能に着目したサービスを提供しています。

「健康運動」

地域支援部の展開



二戸圏域を中心に、依頼により介護予防、特定保健指導等にて地域住民の健康増進に寄与しています。

「職場適応援助者(ジョブコーチ)」
岩手障害者職業センターからの委託により障害者の職場実習の支援に入り、就労に結びつけます。

(地域支援部長 主濱 隆)

今回はこの中から「ふらっと」の地域交流の取り組みを紹介します。

八幡平市地域活動支援センター「ふらっと」

地域活動支援センターの運営に際しては、利用者が地域において自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう、「社会との交流の促進を図ること」が、国から基本方針として示されています。

八幡平市地域活動支援センター「ふらっと」では、センターを利用する方々と地域住民との交流促進の一環として毎年、市内の各団体や町内会の祭り、イベントへ参加させていただいております。

参加の際には、ふらっと利用者との会が中心となりセンター内で運営している、近隣福祉事業所等の生産物の紹介および店舗販売をそのまま会場へ移設したコーナーの他、喫茶「ゆめれたす」特製のコーヒーやジュースの販売、ゲームコーナーなどを、準備から販売まで利用者スタッフが一丸となり、それぞれの時期や場所に合わせた内容で出店しております。

ここ最近では、7月に「ふらっと」の立地する大更町内会主催の「大更ガーデンフェスティバル」へ参加し、輪投げゲームのコーナーが小学生に大変好評でした。



ふらっと 出店の様子

このようなイベントへの参加は、利用者や地域住民の交流の機会であると同時に、地域活動支援センターとはどのようなものであるのかを地域に啓発するための、貴重な機会でもあります。

時折、地域住民の方が文字通りセンターを「ふらっと」訪れ、お茶を飲む姿が見られるのも、前述の活動の成果のたまものであると感じています。

利用者が地域生活を送る上での一助となるべく、今後も、地域に根ざした活動を実践することで、さらなる交流の促進に努めたいと思います。

日頃何かとご協力いただいている地域住民の方々に対し、利用者、スタッフ一同感謝申し上げます。

(主任生活支援員 田中 茂樹)